

隠れた才能

2025. 8. 28

隠れた才能という言葉には、何か魅力的なものを感じる。多重人格のマネジメントを適切に行えば、これまで隠れていた才能を開花させることができる。

世の中に人格形成という言葉があるように、人格は、そのかなりの部分が、生きてきた環境、出会った人間、与えられた経験などにより、後天的に形成される。したがって、環境、人間、経験を適切に選ぶことによって、本来、自分の意志でどのような人格でも育てていける。

とはいえ、現実には厳しい。そこで、現在の人格を変えようとせずに、新たな人格を育てる。怒りやすい人格の人がいたとする。この人格を寛容な人格に変えるのは至難の業である。この怒りやすい人格はそのままに、新たに自分の中に寛容な人格を育てるようにする。そして、仕事と生活の様々な場面で、この寛容な人格を前に出す修業をする。その修業を続けると、少しずつ寛容な人格が育っていく。

ある人格を演じる。ある人格を育てる。この2つは、実は同じことである。ある人格を長期間、演じていると、自然とそれが板についた人格になり、一つの人格として自分の中に育っていく。例えば、ある人物がリーダーの立場に置かれ、周囲からも期待されるリーダー像を気持ちを込めて演じていく。すると、その人物は自然にリーダーらしくなり、いつか、それが本来の人格のようになっていく。いすが人を育てる、ポストが人をつくるなども、同じことだろう。

では、表に出ていない人格をどうすれば表に出せるのか。隠れた人格が表層人格の場合、それを開花させるには、自分が今の仕事にどのような人格で取り組んでいるかを自己観察する。我々は意外と、自分がどのような人格で仕事をしているかを知らない。まずは、この人格を考える。自分でも気づいていない人格と才能は育てようがない。

自分が仕事以外の世界でどのような人格を表しているかを自己観察する。例えば、家族との関係、友人との関係で表れる人格などである。それぞれの関係において、自分の中のどのような人格が表に出ているかを自己観察する。すると、かなり違った自分が表に出ていることに気づくはずである。その自己観察を通して、自分の中にどのような人格があるかを、一度深く見つめてみることである。

人の仕事を観察していると、その人の性格で仕事をしている人が多いことがわかる。多くの人は、自分の性格のことがわかってはいない。自己観察ができていない。自己の客観視といってもいいかもしれない。よく、性格で仕事をするのはだめだと言ってきた。これは、新たな人格で仕事をするということである。隠れた人格によって、隠れた才能が開花する。そうすれば、仕事ぶりも変わる。